

興福寺東金堂院の調査(平城第640次北区)

興福寺は、藤原不比等が奈良時代はじめに平城京左京三条七坊の地に建立した藤原氏の氏寺であり、南都七大寺の一つです。度重なる火災に遭いながらも、堂塔は創建期の規模で再建が繰り返され、伽藍の復興がなされてきました。しかし、享保2年(1717)の被災後は、創建期の復興が叶っていませんでした。現在、興福寺では『興福寺境内整備構想』(1998)にもとづき、寺観の復元・整備を進めています。奈文研は、そのための発掘調査を継続的に実施しており、今回の調査もその一環です。

今回の調査は、東金堂の西正面に開く門とそれに取り付く回廊の基壇や建物の確認、およびその規模・構造等をあきらかにすることを目的に、2021年7月13日から11月4日にかけて実施しました。調査区は、想定される門の全体と、回廊の一部を含む、南北20m、東西13mです(260㎡)。

東金堂院は、東金堂と五重塔を回廊と築地塀で取り囲んでいたとみられ、北面と西面が礎石建ちの単廊、東面と南面が築地塀と考えられています。東金堂は神亀3年(726)、五重塔は天平2年(730)の創建で、東金堂院の門・回廊も同時期の創建とみられます。創建以後、東金堂と五重塔は5回の火災に遭い、現存する堂塔は応永年間(1394～1428)に相ついで再建されたものです。

今回の調査では、東金堂の西正面に門と回廊の遺構がみつかり、それらの位置と規模があきらかとなりました。すなわち門の全体(南北約11m)と、門の南北に取り付く西面回廊の一部(門の北で南北約8m、門の南で南北約1m)を検出しました。検出した基壇外装と雨落溝は、少なくとも2時期に分け

ることができました。一つは、創建期に遡る可能性のある遺構で(奈良時代)、もう一つは、平家による治承4年(1180)の南都焼討後に再建された遺構です(鎌倉時代)。南都焼討の火災痕跡(焼土)もみつかりました。

興福寺境内の発掘調査で、南都焼討の焼土と、その後に再建した遺構を特定したのは今回が初めてです。焼土の直上で、基壇外装が据えられていることを確認しました。この焼土の中には、完形品の土師器皿等が捨てられており、それらの年代がいずれも平安時代末～鎌倉時代初頭であることから、焼土とその直上の遺構の時期の特定にいたりしました。

創建期の遺構は、石組の雨落溝やその抜取溝を検出しました。鎌倉再建期の遺構は、基壇外装(地覆石・羽目石)、階段や雨落溝等を検出し、創建期の位置・規模を踏襲して再建されていることを確認しました。

基壇上面では、礎石の据付穴や根石を検出し、門は桁行30尺(8.8m)の八脚門(桁行3間、梁行2間)で、回廊は梁行12尺(3.6m)の単廊(梁行1間)であることがあきらかになりました。礎石の据付穴は1回分のみ確認でき、現在のところ創建期のものと考えています。

これらのほか、元禄年間(1688～1704)に植えられたとされる「花の松」や、太平洋戦争中に掘られた爆風除けや水槽等がみつかり、近代にいたるまでの、東金堂西正面の宗教空間の変遷がわかりました。

10月9日には、感染症対策を講じた上で現地見学会を開催し、真夏日の暑い中でしたが、949名の方にお越しいただきました。

(都城発掘調査部 目黒 新悟)



調査区全景(北西から)



南都焼討(1180)頃の遺物を含む焼土と、その直上の基壇外装抜取溝(北から)